



所奉. / 10

~ 4
4369



綠亭川柳輯

弘化五歲
戊申發版

秀雅百九一首全

諸名畫集筆錦耕堂梓

秀雅百人一首序

成化三年三月六日

定家卿百人一首之選行于寰內也
 久矣。平常膾炙於人口。窮鄉僻地。三
 尺童子。猶知誦之。故摸擬之俗書。往
 往出大槩。鄙俚不足觀也。今斯書也
 不然。特摭古今有名之士。其詞存
 者。而成此編。不論貴賤。與緇素。不遺
 婦女之細。是皆感動事物。而各吟詠
 其情性者也。人能熟讀沈思。而得其

4
4369


意^ヲ則^レ每章一^モ無^レ不^レ有^二醇味矣。夫倭歌之為^レ德也。大^ナ焉。至^ス其精妙也。能^シ鎔^シ壯士之鐵腸。泣^シ無^レ形之鬼神矣。然則此集亦有^レ裨益于世乎也。不^レ尠^カ焉。請^シ覽者勿^レ徒^ニ為^レ兒女輩玩具云爾。

弘化五年戊申之正月

武南 金水漁人關口秋實題



京極茅門の撰々（る小倉のふさぎをきくよの井にほくろく
形好老と云々免ふまそん清気るんさふたう）されいさよみりつれて
ふくく（英雄列女の分所志）物と様ふ志しよ幸みし
書^ハ輝^クの葉^ハ液^トと（まき）なる故也やれね類を物集めてよふ
えさの志むくふれいさよみも應ふくふさうけ志つれいめ
ふり秋うき書いさよみも應ふくふさうけ志つれいめ
見さうく應ふめあふ秋いさよみも應ふくふさうけ志つれいめ
よの人乃かきうつれいさよみも應ふくふさうけ志つれいめ
花と樂さうきい山田さう農夫一本いさよみも應ふくふさうけ志つれいめ

けしきありては門ふらたれりう素とてすむまははさきあつ
 ぶらあしゝふちのさつたつて風のつくに閉るんほひおろる
 美みまろり入はる藤原さめくうらふま書とあ秀雅百そとと
 名つく海まのうけおちろるからつゝあめめさるれかま行
 るあやほのちかくむらさきはくさつこのまよりも志けさく梓
 ろうあま見ん人乃歌わらわんまのまこころおゆれたつうのろ
 とものまゝわさしこのまめせあつたはさつゝけようしん
 まうふゝゝす
 了ん入成申さきまき旦
 録事門柳


比百首の書例言のせ一歌其計わらあつねと只めを度歌或は徳り
 人まのい分例言も雅な富る人とのみのせぬまを世と聞えさ
 のありて思ふも除くまをる作者あつねも入ねれとと数あつた
 変るるは是とよめみや嫌ひあつて落すうらあつたまのり
 よう字ふてとあつて簡編と今つゝ口絶み見聞のまをらとあつた
 があつたり又聊不審あるは省且廣く求めらるる隠れし人を
 得ぬとれとそい次郎百首の例もあつた拾遺のたと入を
 作者の傳とまのりて張たつてあつた各中子り限りあつた抄畧
 してのまをらとあつた只児童の聞やまをらつたこのまをらと
 一歌小傳とも書抜とあつた張證とあつたまをらつた余紙あつた
 且は是をも書抜とあつた附伊書とあつた抄書とあつたまをら
 本のゆあつた一はまのりて誤りもあつた其まをら
 した人おろしとあつた改りよとあつたまをらあつた悦びつは
 ま其歌の真傳とあつたまのりてあつたまをらとあつた

圖の下の
 本あるは...
 九...
 不...
 開...
 行...
 乃...
 の...
 取...
 石...
 よ...
 小...
 池...
 池...
 池...
 池...
 池...



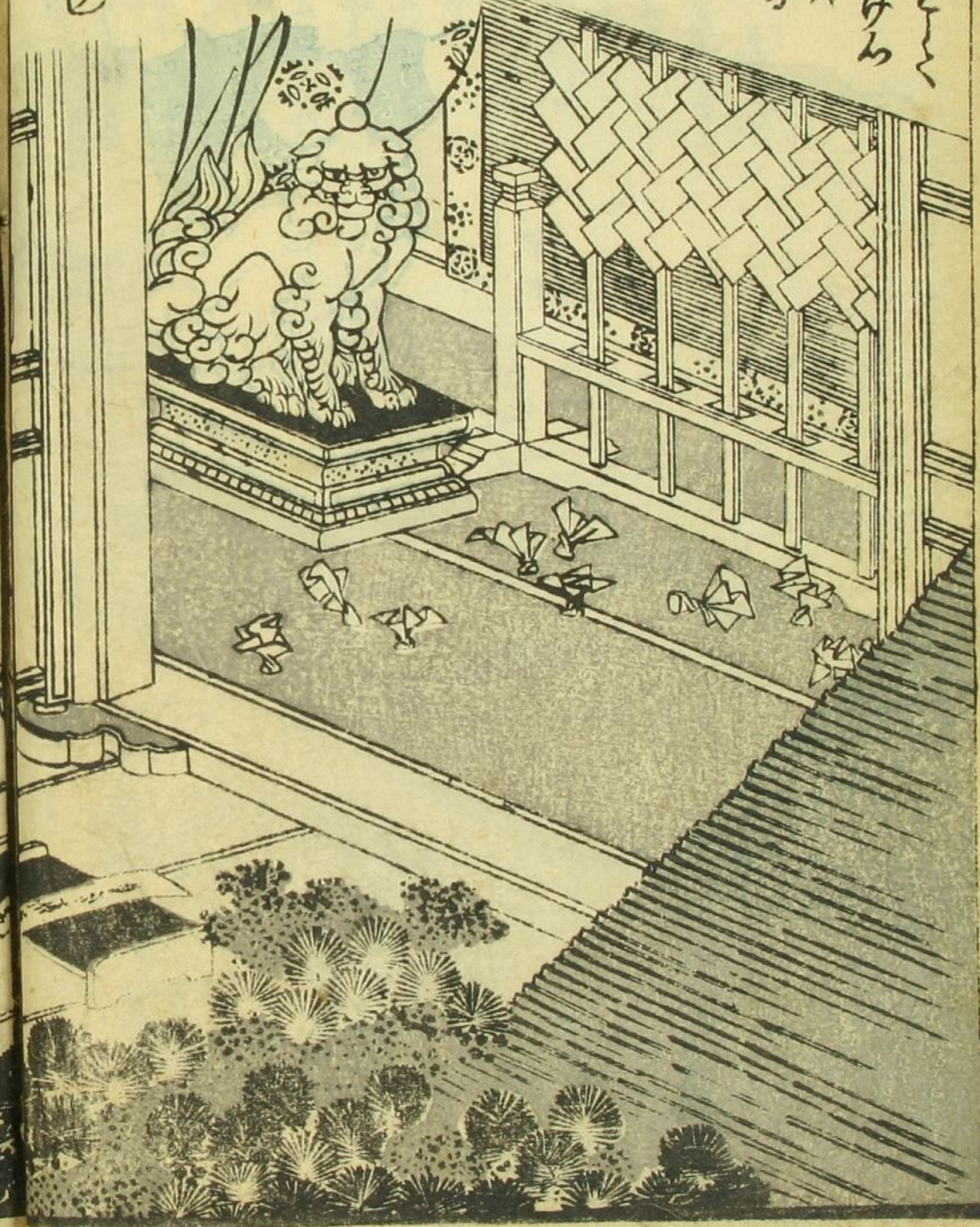
本
 卷
 一
 百
 首

文和...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...

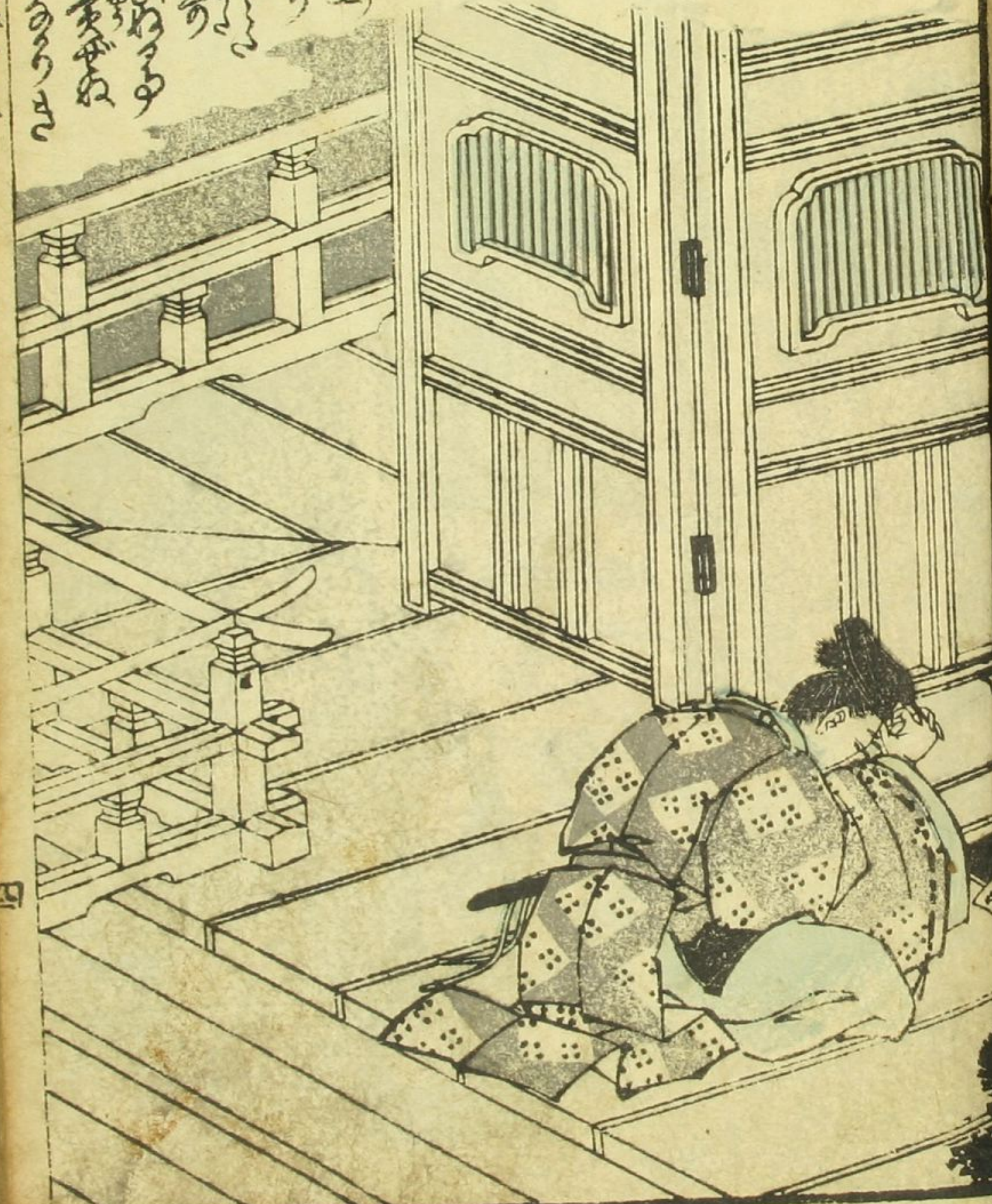


十
 七
 年

人の車なきかごとく
 陽さるる風をよみん
 一しく候わまは
 作の意度ある
 のありわらひ
 八月十八日
 おまかせの中
 あまきこぼる
 とのいづれ
 秋の地まの
 秋のよみ
 のゆらゆら
 禱せをあら
 とはげら
 新ちま長明
 望まかきよ
 あつとら
 仲木の月影
 中よ長明



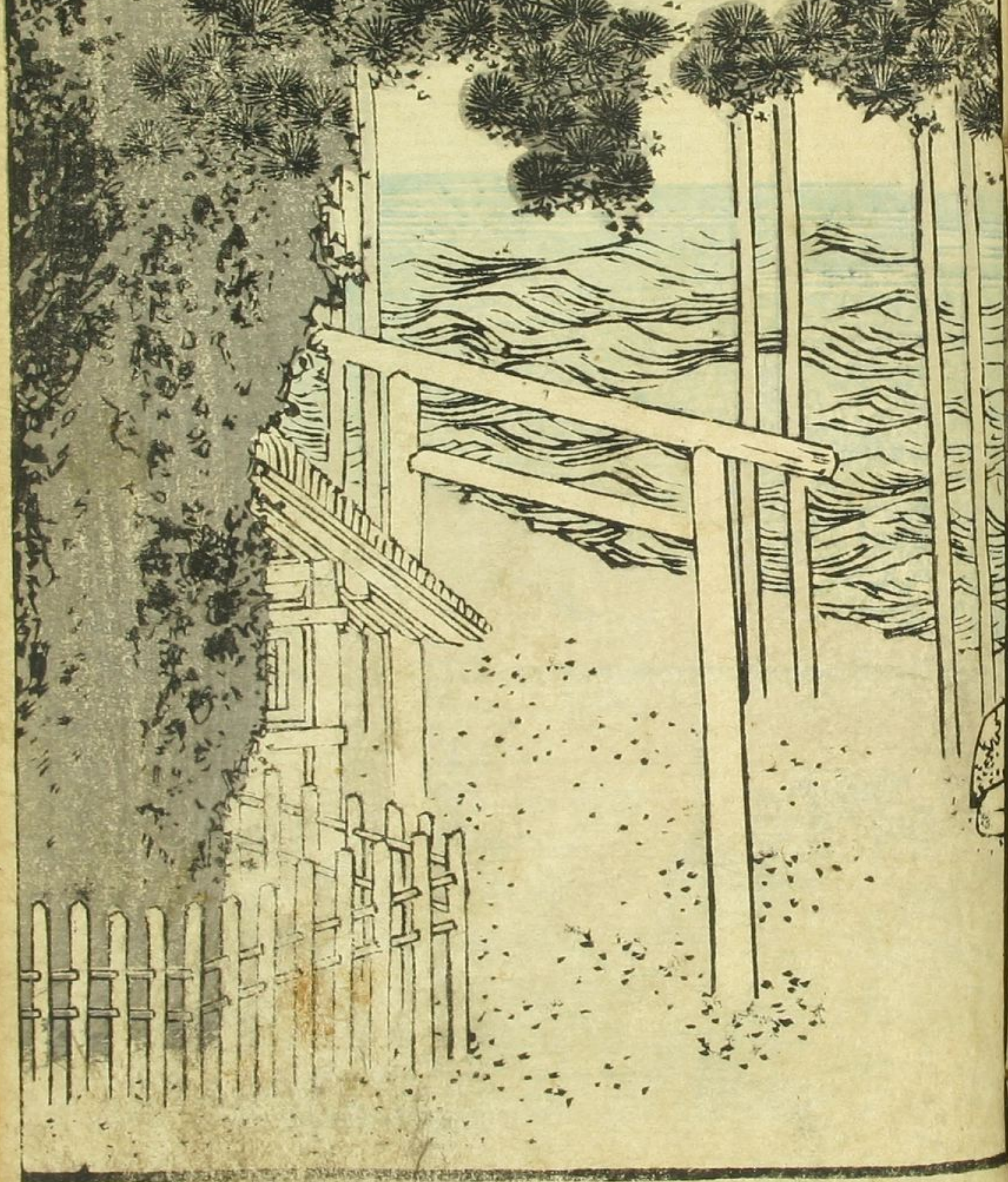
秋風よみ法樂
 去きま 命せ
 らむけまを
 度のみ
 一ふたをんこ
 わゆらの
 あじ
 あまきこぼる
 秋の地まの
 秋のよみ
 のゆらゆら
 禱せをあら
 とはげら
 新ちま長明
 望まかきよ
 あつとら
 仲木の月影
 中よ長明



わし明彦のらう後柏系院
流作ありとこと流國大死よ
とれ直ん有するものこころよ
ありはく中御使ありたすも
るへ通遠院実隆公母氏
おのりせあひ山科の御入
しおはあつて平治の御入
あふの系直も実隆公の
門の御首
田舎公の妻めいしを念ふそ
そゝるそとそそりありき
実隆公をそそりし服よ
一丁のひしそそりあふ
あふねと命張あふ
あふ
永正十七年正月七日
めを安海屋あし
うが安海屋
たふまを押わ



乃の御使ありとこと流國大死よ
流作ありとこと流國大死よ
とれ直ん有するものこころよ
ありはく中御使ありたすも
るへ通遠院実隆公母氏
おのりせあひ山科の御入
しおはあつて平治の御入
あふの系直も実隆公の
門の御首
田舎公の妻めいしを念ふそ
そゝるそとそそりありき
実隆公をそそりし服よ
一丁のひしそそりあふ
あふねと命張あふ
あふ
永正十七年正月七日
めを安海屋あし
うが安海屋
たふまを押わ





此の巻は...
 和回れ...
 雲よ...
 波よ...
 あめ...
 まの...
 がの...



夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...
 夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...
 夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...
 夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...

夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...
 夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...
 夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...
 夫の... 池田... 新井... 池田... 新井...

新井白首



園珠

みも

入服

洗



明石檢校

夜比秋の

忘哉

く碑

物にが

秀光院將軍軍書...
 入まぬ不敵の...
 相河...
 月...
 板...
 怪...
 不敵...

相河...
 月...
 板...
 怪...
 不敵...



秀光院將軍軍書...
 入まぬ不敵の...
 相河...
 月...
 板...
 怪...
 不敵...

道...
 怪...
 板...
 月...
 相河...



松竹梅の三徳を象徴する句
松竹梅の三徳を象徴する句
松竹梅の三徳を象徴する句

児童之河



君なき 女も悲し
 春の 入りに
 名を告ぐ

四

松竹梅の三徳を象徴する句
松竹梅の三徳を象徴する句
松竹梅の三徳を象徴する句

宗祇



春の 入りに
 名を告ぐ

五

青柳の具平親王の巻物
切なる恋心もむ八木の付一
ふあひして指さるる人も人後
「あつちのよきあつちのよき人
ひかりりれり青柳のよき人
「あつちのよきあつちのよき人
此よきあつちのよきあつちのよき人
南よきあつちのよきあつちのよき人
人後よきあつちのよきあつちのよき人
青柳の具平親王の巻物
切なる恋心もむ八木の付一
ふあひして指さるる人も人後
「あつちのよきあつちのよき人
ひかりりれり青柳のよき人
「あつちのよきあつちのよき人
此よきあつちのよきあつちのよき人
南よきあつちのよきあつちのよき人
人後よきあつちのよきあつちのよき人

宗橋の巻物
切なる恋心もむ八木の付一
ふあひして指さるる人も人後
「あつちのよきあつちのよき人
ひかりりれり青柳のよき人
「あつちのよきあつちのよき人
此よきあつちのよきあつちのよき人
南よきあつちのよきあつちのよき人
人後よきあつちのよきあつちのよき人
宗橋の巻物
切なる恋心もむ八木の付一
ふあひして指さるる人も人後
「あつちのよきあつちのよき人
ひかりりれり青柳のよき人
「あつちのよきあつちのよき人
此よきあつちのよきあつちのよき人
南よきあつちのよきあつちのよき人
人後よきあつちのよきあつちのよき人

牡丹花内相

思入らし

はらり

かざり

みわ

人毛

かほらし

折らぬ

月夜帳



宗橋

風おこ

人毛

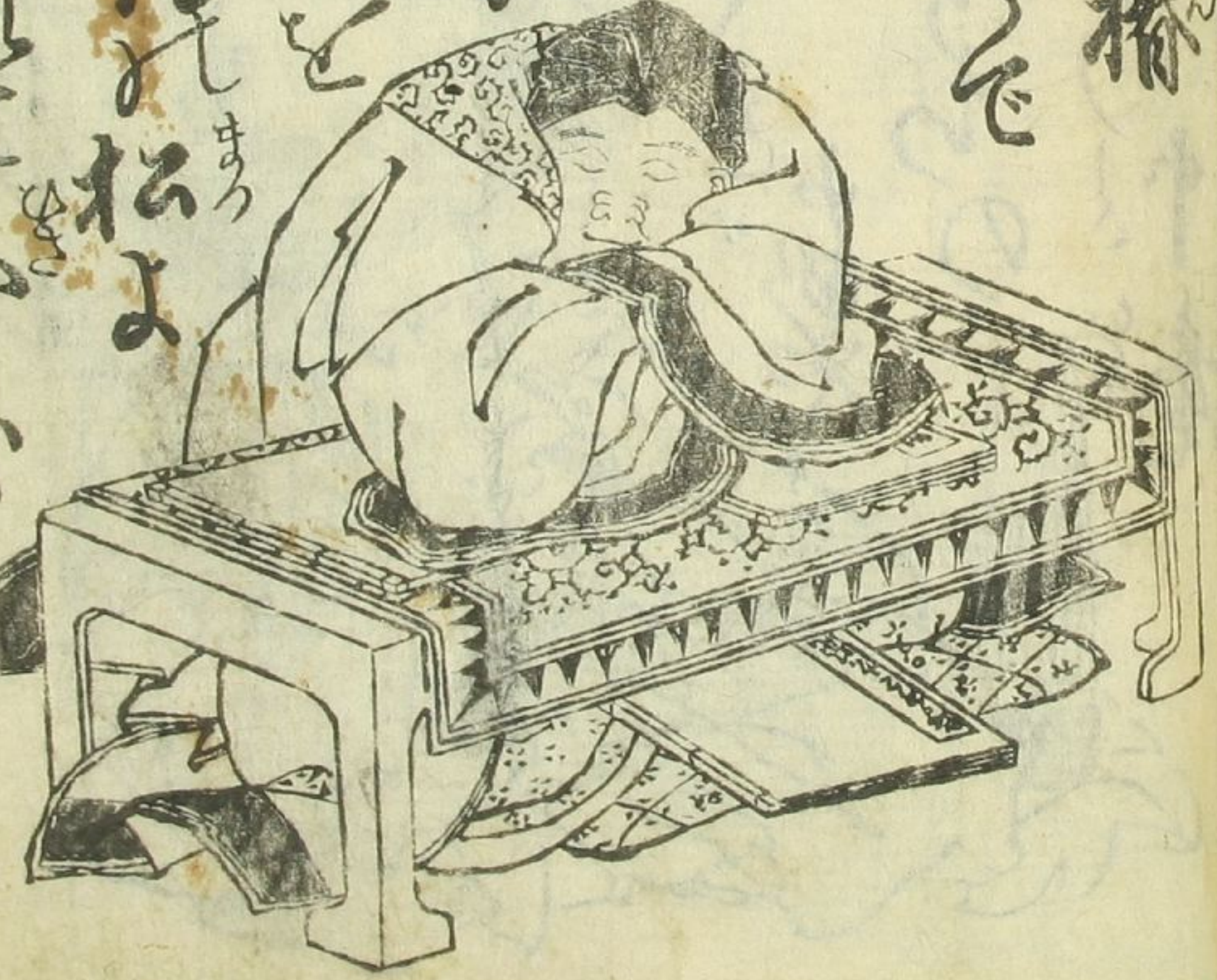
あつち

我店

あつち

形端れ松よ

なれて久し



白菊の世に... 豊原系統秋...
 白菊の世に... 豊原系統秋...
 白菊の世に... 豊原系統秋...



古今和歌集

貞孝の徳の國の邊の池のほとり
 神代に生きたるのまじりて
 月有流のしるしをみよとて
 けりしを後世に傳へて
 とあるに
 池のほとり
 けりしを
 とあるに

天文十六年
 池のほとり
 けりしを
 とあるに

神代に生きたるのまじりて
 月有流のしるしをみよとて
 けりしを後世に傳へて
 とあるに
 池のほとり
 けりしを
 とあるに

古今和歌集

浦生貞秀

林ゆり

小野山風

ゆり

ゆり

ゆり

ゆり

ゆり



釋春朝

老たるも

若きも

月

家

の

人

玉



又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた
又西の邊の國を極めた



今川義元
あまの
おし
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と
今川義元の足利氏と



今川氏真
あまの
おし
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

武田大膳者美入... 又後引... 一法... 天正元年... 大... 不...



武田信玄
あひひて
なけれ
さ
松ら
の

一入中の... 七千余... 天正... 四十九年... 一期...



武士の
袖
か
花
初

千利休は下町に生れたが、幼くして上戸の家に養われ、茶道の道に進む。その人柄は、謙虚で、人柄が好まれる。茶室の設計も、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。



千利休の茶室
茶室の設計は、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。茶室の設計は、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。

千利休の茶室は、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。茶室の設計は、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。



千利休の茶室
茶室の設計は、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。茶室の設計は、簡潔で、自然の風情を生かす。その精神は、後の千利休の精神に受け継がれる。

源水家方肥後國相模原守
 水保の誠遠天正七年藩將
 城を圍む事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し
 守る事難し守る事難し



源水家方
 空蟬の
 羽より
 落る身を
 ほくし
 心を
 みる

惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿
 惟久卿



風より
 人の
 心を
 みる
 枝の
 梢より

梅林の書太閤の書...
 の...
 胸...
 柿...
 あり...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

浦生氏...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

木下庵百景

梅林
 梅林
 待
 老の
 あろふ

浦生氏郷
 公みちのた
 表れふりせ

木下庵百景

石門史山い指の... 二葉の... 長浦の...
石門史山い指の... 二葉の... 長浦の...
石門史山い指の... 二葉の... 長浦の...

長浦の... 山崎の... 長浦の...
長浦の... 山崎の... 長浦の...
長浦の... 山崎の... 長浦の...

待仙堂丈山



せみせ... 小の... 老の波... 乾も...
せみせ... 小の... 老の波... 乾も...

長浦の



山崎の... や... 相...
山崎の... や... 相...

浦島太郎の物語は、昔から日本人の心を捉へてゐる。その理由は、この物語の中に、人間の希望と現実の対比が、よく表現されてゐるからである。浦島太郎は、偶然の機嫌で、龍宮の姫と出逢ふ。そして、龍宮の生活に耽溺する。しかし、龍宮の生活は、地上の生活とは異なる。そこには、時間と空間の概念が、地上とは異なる。龍宮の生活は、地上の生活よりも、はるかに長い。そして、龍宮の生活は、地上の生活よりも、はるかに美しい。浦島太郎は、龍宮の生活に耽溺する。そして、龍宮の生活に耽溺する。

浦島太郎の物語は、昔から日本人の心を捉へてゐる。その理由は、この物語の中に、人間の希望と現実の対比が、よく表現されてゐるからである。浦島太郎は、偶然の機嫌で、龍宮の姫と出逢ふ。そして、龍宮の生活に耽溺する。しかし、龍宮の生活は、地上の生活とは異なる。そこには、時間と空間の概念が、地上とは異なる。龍宮の生活は、地上の生活よりも、はるかに長い。そして、龍宮の生活は、地上の生活よりも、はるかに美しい。浦島太郎は、龍宮の生活に耽溺する。そして、龍宮の生活に耽溺する。

大の佳一日

の人 浦島太郎
 云々 青島かゆせ
 わの あゆみ



猪尻常房
 長 ねがひ
 春も 由さる
 年 けつ



右の通り... 柳田金平... 武士の... 救め... 入ら... 教あん... 柳も... 榎も...



真徳... 柳田金平... 武士の... 救め... 入ら... 教あん... 柳も... 榎も...



木乃佳百首

其の言をせんせしむるに
 惺高先生は冷然と云ふに
 日中其の徳ありと賞せしむる
 那羅人本朝にせしむる英國に
 執りてその徳ありと賞せしむる
 去つて其の徳ありと賞せしむる
 林道春の徳ありと賞せしむる
 一ふれぬ 雲の上をきりぬ
 九性徳ありと賞せしむる
 果敢が徳ありと賞せしむる
 一ふれぬ 雲の上をきりぬ
 九性徳ありと賞せしむる
 果敢が徳ありと賞せしむる

其の言をせんせしむるに
 惺高先生は冷然と云ふに
 日中其の徳ありと賞せしむる
 那羅人本朝にせしむる英國に
 執りてその徳ありと賞せしむる
 去つて其の徳ありと賞せしむる
 林道春の徳ありと賞せしむる
 一ふれぬ 雲の上をきりぬ
 九性徳ありと賞せしむる
 果敢が徳ありと賞せしむる
 一ふれぬ 雲の上をきりぬ
 九性徳ありと賞せしむる
 果敢が徳ありと賞せしむる



折柳の姿は高松の氣息を
め香のたつた新靴のたつた
面は柳のたつた新靴のたつた
とのたつた父の信のたつた
折柳の姿は高松の氣息を
め香のたつた新靴のたつた
面は柳のたつた新靴のたつた
とのたつた父の信のたつた
折柳の姿は高松の氣息を
め香のたつた新靴のたつた
面は柳のたつた新靴のたつた
とのたつた父の信のたつた

折柳の姿は高松の氣息を
め香のたつた新靴のたつた
面は柳のたつた新靴のたつた
とのたつた父の信のたつた
折柳の姿は高松の氣息を
め香のたつた新靴のたつた
面は柳のたつた新靴のたつた
とのたつた父の信のたつた

折野常信

折柳の

折柳の

折柳の

公あさむね

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の

折柳の



長流の初めは南の北で中津より
 雅治の初めは南の北で中津より
 この流の初めは南の北で中津より
 又中津の初めは南の北で中津より
 一世の初めは南の北で中津より
 長流の初めは南の北で中津より
 又中津の初めは南の北で中津より
 一世の初めは南の北で中津より
 長流の初めは南の北で中津より

河内梨英沖の身ハ
 松よかくととも
 代々
 上小
 まえるを



さくらんぼの... 依り田島俊... 養老百首... 依り田島俊... 養老百首...



依り田島俊... 養老百首... 依り田島俊... 養老百首...

田島俊... 依り田島俊... 養老百首... 依り田島俊... 養老百首...



田島俊... 依り田島俊... 養老百首... 依り田島俊... 養老百首...

一、いづれの... 二、いづれの...
 三、いづれの... 四、いづれの...
 五、いづれの... 六、いづれの...
 七、いづれの... 八、いづれの...
 九、いづれの... 十、いづれの...
 十一、いづれの... 十二、いづれの...
 十三、いづれの... 十四、いづれの...
 十五、いづれの... 十六、いづれの...



人の心を
 神代は
 無訳で海
 いくと
 素直
 ぬと
 ろろ
 むね
 むね

一、いづれの... 二、いづれの...
 三、いづれの... 四、いづれの...
 五、いづれの... 六、いづれの...
 七、いづれの... 八、いづれの...
 九、いづれの... 十、いづれの...
 十一、いづれの... 十二、いづれの...
 十三、いづれの... 十四、いづれの...
 十五、いづれの... 十六、いづれの...



中の夜
 樹
 風
 骨
 骨
 骨

元政...
寛文八年...
コノ山...
海軍の元...

重義... 誰知霜... 松霜...
至今一塚堆...
誰知霜又默然意...
松霜岳弟松促煙...

凍菓元政
及ぬ
あり
あると
心わり



橋成倍
霜の
おのが
今約



秀三首

秀三首

永徳... 徳とくらべて

永徳は徳川の白鳥の徳徳は... 徳とくらべて... 徳とくらべて... 徳とくらべて...

白鳥永徳

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて



徳とくらべて... 徳とくらべて... 徳とくらべて... 徳とくらべて...

小村季分

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて

徳とくらべて



古今百首

あまのうらみはまきと
二三のねは肥後と号し
新田の武はあつとを
えと精し新田とを
るの武はあつとを
てその武はあつとを
の武はあつとを
りての武はあつとを
とも武はあつとを
は武はあつとを
より武はあつとを
す武はあつとを
りての武はあつとを
の武はあつとを
るの武はあつとを
てその武はあつとを
の武はあつとを
りての武はあつとを
とも武はあつとを
は武はあつとを
より武はあつとを
す武はあつとを

あまのうらみはまきと
二三のねは肥後と号し
新田の武はあつとを
えと精し新田とを
るの武はあつとを
てその武はあつとを
の武はあつとを
りての武はあつとを
とも武はあつとを
は武はあつとを
より武はあつとを
す武はあつとを
りての武はあつとを
の武はあつとを
るの武はあつとを
てその武はあつとを
の武はあつとを
りての武はあつとを
とも武はあつとを
は武はあつとを
より武はあつとを
す武はあつとを



吉川惟定の集りては...
一、夜はゆか...
二、夜はゆか...
三、夜はゆか...

吉川惟定
慎を人の
根は治れ
と
志は
吉原の
海と
あそびさく



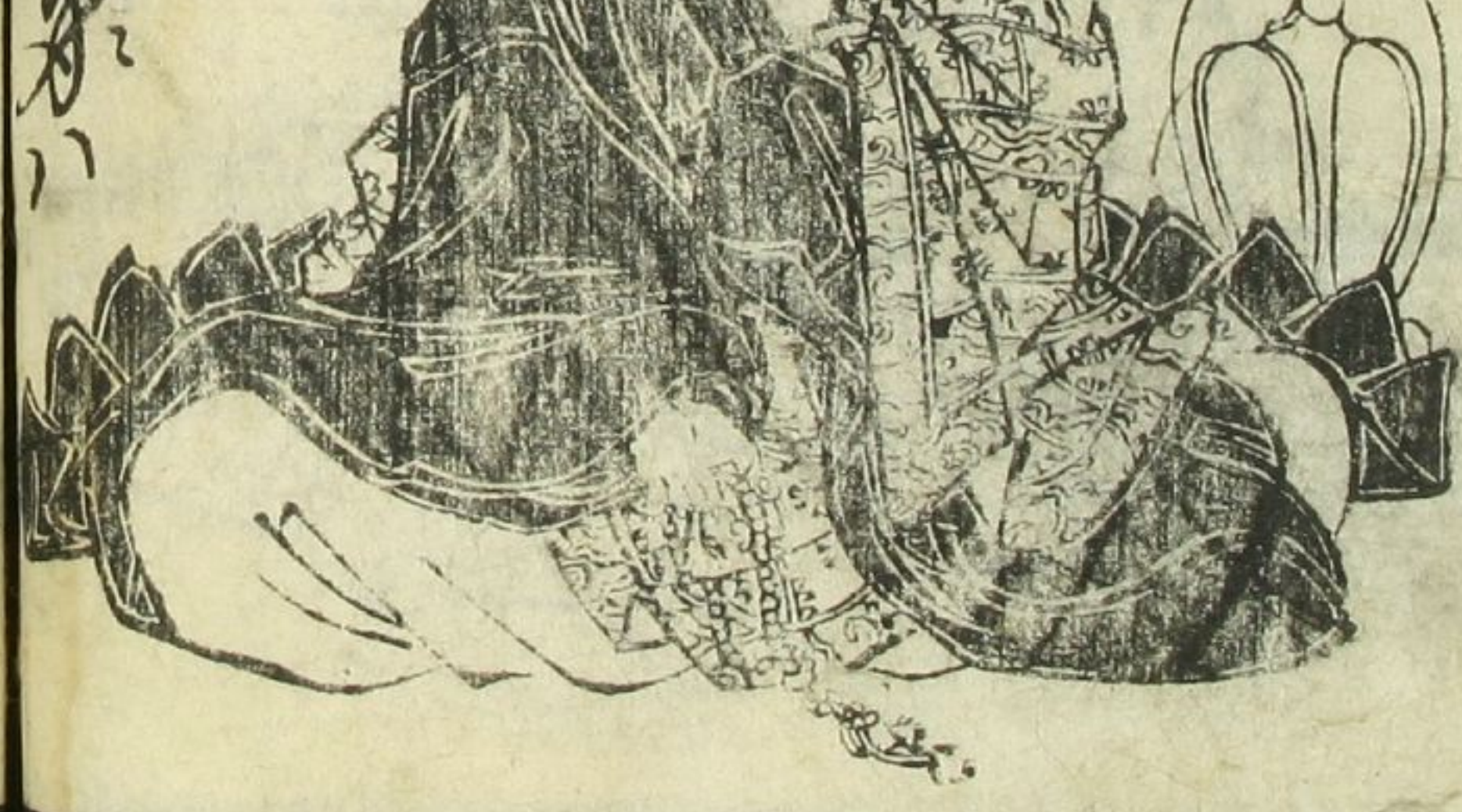
...の一人...
...の一人...
...の一人...

あそびさく
一夜を
ら
やせ
あそびさく
あそびさく



Handwritten Japanese text in a vertical column, likely a preface or commentary on the illustrations below.

浄命坊
か
恒とと
お
若
倉
お
お



物者柳泊末
我
柳
枝
長
常



ひげのまきつらやあましの
はくまの和列の尻下を
門の船人あまの由上は
附けの船人あまの由上は
その船の船の船の船の船
のいふはあまの船の船の船
此の船の船の船の船の船
ひげのまきつらやあましの

ひげのまきつらやあましの
はくまの和列の尻下を
門の船人あまの由上は
附けの船人あまの由上は
その船の船の船の船の船
のいふはあまの船の船の船
此の船の船の船の船の船
ひげのまきつらやあましの

池田心武

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ



継庵

やうわらぬ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ

あふらうりつ



あふらうりつ

伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を...
 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を...
 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を...

伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を...
 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を...
 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を... 伊と仁義の人の性を...

伊と仁義
 上れり人
 深りも
 我より
 下れり人
 人を
 人をも

河瀬山
 杖の
 袂お
 その
 物忘れ
 すけり
 度の梅が枝

赤穂義士十内考
極死のころ
後継ぎ
くろくろ
一別
又志

大石良雄
大石良雄の
大石良雄の
大石良雄の
大石良雄の

萬山不重君恩重
一髪不軽一命軽
榎花朝雖開眉
思郷斷腸不待夕
思ひの身はむす
のまのこころの

小野寺秀和



関人の

大石良雄



大石良雄
大石良雄
大石良雄
大石良雄
大石良雄

英一様は寛文六年十一月に...
九月二十日...
の紀とあり...

英一様は寛文六年十一月に...
九月二十日...
の紀とあり...

英一様

由緒

深壺

己の

彩も

月の

傾城勝山

おん

道

谷

谷



舟橋百首の巻の序の文... 舟橋百首の巻の序の文... 舟橋百首の巻の序の文...

舟橋百首の巻の序の文... 舟橋百首の巻の序の文... 舟橋百首の巻の序の文...

浮沈奇

及人の

のし

あま

志

単

枕

うやうやしくさびふ

神やかえりて



舟橋百首

雲法師

あま

お斗

なる

葉の

依ん

山風を



迎松門の... 平去堂... 世... 自... 井... 物... 行... 天... 心... 世... 人... 松...



親... 有善有惡... 無善無惡... 知善知惡... 為善去惡... 聖...



大の... 及濱松神明町... 住る... 人のひ... 新... 明々徳... 格物... 致知... 格物... 致知... 格物... 致知...

大の... 及濱松神明町... 住る... 人のひ... 新... 明々徳... 格物... 致知... 格物... 致知... 格物... 致知...



大も... 初春... きの... ま... 身ね... ま... 山... 山... 山...



大も... 初春... きの... ま... 身ね... ま... 山... 山... 山...

ういこのあまのこ... 春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...
 春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...
 春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...

七タのあまのこ... 七タのあまのこ... 七タのあまのこ...
 七タのあまのこ... 七タのあまのこ... 七タのあまのこ...
 七タのあまのこ... 七タのあまのこ... 七タのあまのこ...

春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...
 春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...


春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...
 春の満ちたる... 春の満ちたる... 春の満ちたる...


此の書は... 新井白蛾の... 著述の... 内容... 詳細な書評や序文の断片が記されている。

此の書は... 新井白蛾の... 著述の... 内容... 詳細な書評や序文の断片が記されている。

本居宣長

志死 悟れ

倭人

朝月

山楼

白蛾

新井白蛾



あゝ 楽や

をねも

のみ

ぢも

忘れ

て

鳥の物ねも

あゝ

株よりの



仲山は遠く舟の中山に舟を十
 年の事は知らぬおともは十年
 つまらぬの業に引ずるは法外を
 任せあつてこの世をいつくほむを
 知るまればおとす不自由さなりて
 夢のまはれ人かたしおとすを
 おとすはいつて死にては死に
 舟のまはれおとすは死に死に
 するはまはれおとすは死に死に
 するはまはれおとすは死に死に
 やつてはまはれおとすは死に死に
 するはまはれおとすは死に死に
 するはまはれおとすは死に死に
 するはまはれおとすは死に死に

仲山仲者

世よ

又

又 我為の

命なり

仲山の

石川為茂

秋ゆた

危れ

危れ

おれたそ

露の

霜の月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月
 ぬれぬ月



甲の八景の川の正に流るるに
 乙の八景の川の正に流るるに
 丙の八景の川の正に流るるに
 丁の八景の川の正に流るるに
 戊の八景の川の正に流るるに
 己の八景の川の正に流るるに
 庚の八景の川の正に流るるに
 辛の八景の川の正に流るるに
 壬の八景の川の正に流るるに
 癸の八景の川の正に流るるに

甲の八景の川の正に流るるに
 乙の八景の川の正に流るるに
 丙の八景の川の正に流るるに
 丁の八景の川の正に流るるに
 戊の八景の川の正に流るるに
 己の八景の川の正に流るるに
 庚の八景の川の正に流るるに
 辛の八景の川の正に流るるに
 壬の八景の川の正に流るるに
 癸の八景の川の正に流るるに

甲の如
 乙の如
 丙の如
 丁の如
 戊の如
 己の如
 庚の如
 辛の如
 壬の如
 癸の如



甲の如
 乙の如
 丙の如
 丁の如
 戊の如
 己の如
 庚の如
 辛の如
 壬の如
 癸の如



檢校保巳... の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...

保巳... の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...
の... 諸君...

橋檢校



雲の白土根

目小見ぬ
なづくわ

橋千蔭



おやぎん
み心の
ねんま

香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹
香樹の因縁を考へて初年香樹

輯者

緑亭川柳

畫工

口繪及
前北齋卍老人

全

從十一至二十
一勇齋國芳

全

從廿一至三十
柳川重信

全

從三十一至四十
溪齋英泉

全

從四十一至五十
一陽齋豊國



香川家樹

言砂の

あしも

閑え

君が

お茶の

りおが

後用き

英雄拾遺百首

緑亭川柳輯

近刻

英雄百首に洩たる武士の詠歌を集めて肖像や
小傳歌物語等を録し面白き本なり其外先生
著述の繪草紙数本追々出版仕ゆる相契
らば所求済む程と程を希い

于時弘化五戊申年正月發兌

馬喰町二丁目

東都書肆 山口屋藤兵衛梓

發行書林

大坂 東 都

河内屋茂兵衛
綿屋喜兵衛
出雲寺萬次郎
須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小林立新兵衛
英原大助
須原伊八
岡田嘉七
和泉市兵衛
丁子屋平兵衛
山崎屋清七
山口屋藤兵衛

